

# 江西省仏教寺院訪問記

鎌 田 茂 雄

中国名勝志典叢書の王仲奮編著『中国名寺志典』（中国

旅游出版社、一九九一年三月）の江西省の項には、江西省

の名刹として万寿宮、佑民寺、崇福寺、東林寺、海会寺、

黄龍寺、能仁寺、雲居寺、上清宮があげられているが、この中で訪問することができたのは、佑民寺、東林寺、能仁寺、雲居寺であり、その他、禅宗の名刹も廻った。なお江  
西省ではなく湖北省に属する黄梅県の四祖寺と五祖寺を見  
ることができた。この記録は一九九五年九月五日から十五  
日のわずか十日間の旅であり、十分に調査することはでき  
なかつたので、これは旅の見聞記であるにすぎないもので  
ある。

## 宝華寺

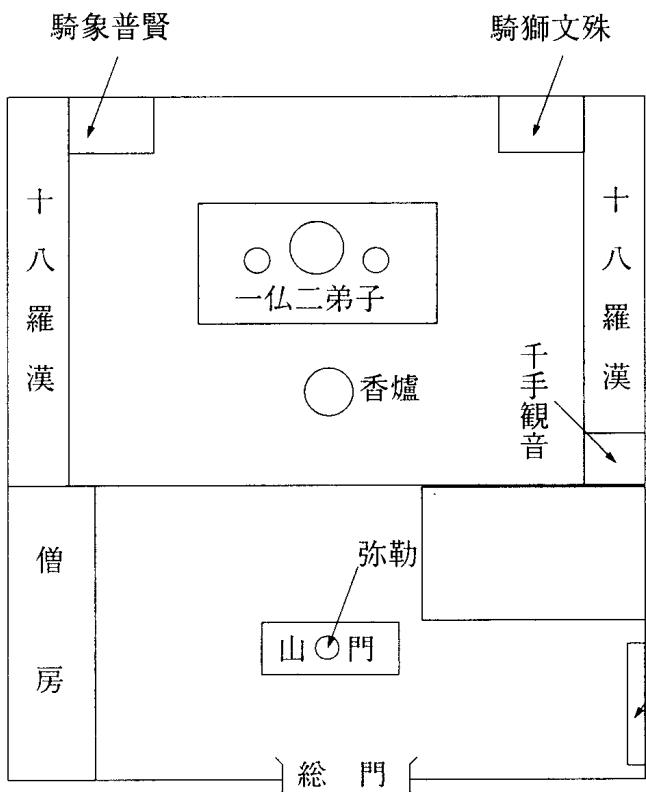
贛州市の飯店を出発した車は贛江にかかる大橋を渡り贛  
県の県城を目ざした。周囲には起伏の多い丘陵や水田がつ  
づく。丘陵には松、竹などがおい茂り、平地の畠にはさと  
うきび、さつまいも、とうもろこしなどが栽培されていた。  
水庫（ダム）や小川を見ながら一路種田鎮を目指した。

種田鎮は商店が多く人も群れていたが、その一角にある  
のが契真寺である。三年間、南華寺の仏学院で勉強したと  
いう界忠法師が住持をしていた。

種田鎮にある契真寺は現在、尼僧の寺であるが、その歴

契真寺志

種田鎮契真寺



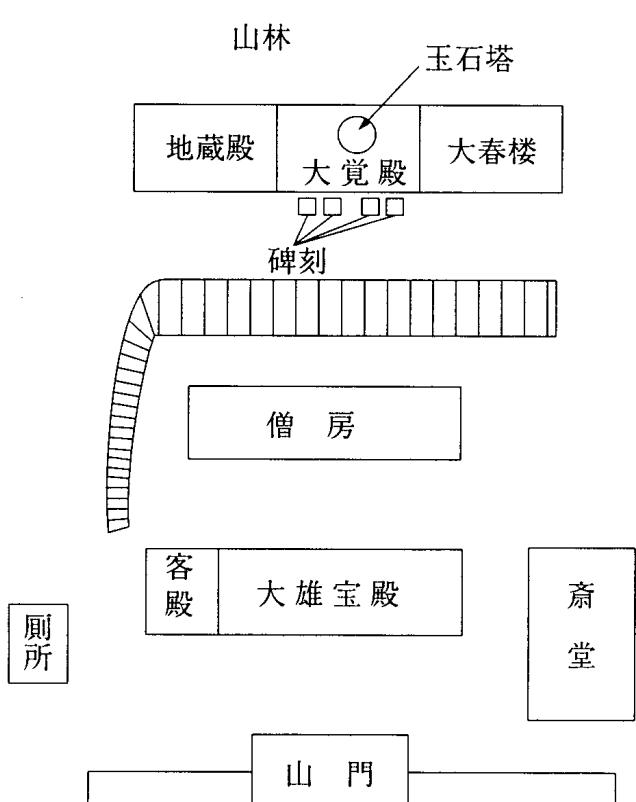
種田鎮を出てさらに進むと瑞峰山山林区と書かれた地域を通り一路、宝華寺を目指した。やがて竹がおい茂った山麓で車を下りた。宝華寺の前である。山門には「選仏場」と書かれた扁額がかかげられ、「宝華古寺」という額が下げられていた。そのほか「龔公山宝華寺原貌図」や「天下名山馬祖共視」と書かれたものや、「龔谷山宝華寺規劃図」が掲げられていた。

宝華寺は江西省贛県田村鎮の北方十五キロにある龔公山にある。この宝華寺は唐の天宝年間（七四二—七五六）に建てられた寺で千二百年余りの歴史を有する。寺内には殿堂が三棟五殿あり、その占地面积は五、一〇〇平方メートルといわれている。寺域には昔から玉石塔、千人鍋、千人床、千年柏、白果樹（銀杏）、竜泉井、山木井、四方竹、古鼎鐘、倒裁葱など宝華十宝といわれるものがある。中でも玉石塔は江南の名塔といわれ、一九五七年には江西省の省級重點文物單位に指定された。

宝華寺は一九八八年に修復が始まり、現在十三人の僧侶がおり、新しく六九体の仏像を造り、正常に仏事活動も行なわれている。

史は古く、千三百年前の創建といわれる。山門を入ったすぐ右の壁には「契真寺志」が刻されていた。天王殿には布袋（弥勒）が安置され左には僧房があつた。奥の大雄宝殿には釈迦と迦葉と阿難が中央に、両側には十八羅漢が、左右の奥には騎象の普賢と、騎獅の文殊が安置されていた。

宝華寺は何度も壊され、何度も重修された。史料の記載によれば、現存している殿堂は清の道光十五年（一八三五）に重修されたという。殿堂の構造は三棟に分けられている。上棟には地蔵殿、大覚殿、大春楼（坐禅修行する所）があり、中棟には、大雄宝殿、觀音殿があり、前棟には天王殿がある。



龔公山宝華寺

長い間、修理をしなかつたため、また僧が居住していないかったため殿堂が荒廃していたが、現在は修復が進んでいる。文革後に新しく造られた天王殿には型通りの四天王が安置されていた。一九八八年に修理された大雄宝殿には三世佛と十八羅漢が祀られている。この大雄宝殿の隣りに客殿があり、ここで湯茶の接待を受けた。

客殿を出て山の麓に沿った山道を登り、右へ曲がると大覚殿、地蔵殿、大春楼などがある古い建物の前に出る。大覚殿の中には玉石塔がある。智藏禪師が入寂後、唐の憲宗より智藏大師の諡を受けたが、塔名は大宝光と言つた。この塔はすべて玉石で雕刻されているので玉石塔と称されたのである。玉石塔は室内の塔であり、塔は七層よりなる。塔内の正面には小仏像がいくつもある。塔身には唐代の李渤撰の碑銘がある。この碑銘は唐代の書法家、柳公權が書いたものである。ちなみに柳公權は西安草堂寺の鳩摩羅什舍利塔（拙稿「唐代佛教と鳩摩羅什」——鳩摩羅什舍利塔をめぐって——『印度学仏教学研究』四三卷一号、平成六年十二月）の碑文を書いた人でもある。塔の四面には動物

江西省仏教寺院訪問記（鎌田）

や花紋などの図案が彫刻されている。この彫刻はすこぶる秀麗であるためこの塔は江南の名塔といわれている。この玉石塔の下には井戸があるといわれる。

大覚殿の前にはいくつかの碑刻がある。それらの碑刻には左のような文字が読みとれる。

「唐咸通十五年二月五日建」

「宋元豐二年七月十五日住持伝法沙門釈覺顕重建」

「重修宝華寺大雄殿記」

清道光乙未十五年」

## 二 吉安市

### 青原山淨居寺

吉安市の東南九キロのところに青々と草木が茂った山があるが、青原山と呼ばれている。青原山は昔からその名が知られていた。漢代には張道陵（張天師）は天下の三十六の名山を道教の山としたが、青原山もその中に加えられたという。二千余り前、青原山は勅命によつて中国の名山の一つとされたため、独特の風格を持つようになつたといわれる。江西の佛教界には昔から「天上雲居」（高く聳え

た赣州の北にある雲居山には真如寺があること）と「地下青原」（吉安市の、海拔百メートルの青原山に淨居寺があること）という言葉があるという。これは恐らく青原山が高くはないが常に青々としており、青い水がさらさらと流れているからであろう。

古来から多くの詩人が青原山について詩を詠んでいるが、青原山が昔から江南第一の風光明媚な勝境であることをよく説明している。

青原山は七祖が開いたものである。唐代は中国佛教の最盛期であり、仏門の高僧は名山を選んで講經し佛教を宣揚した。当時、青原行思（？—七四〇）がまだ悟りを得る前に青原山に遊び、その山水の佳絶なるを見て、手で荆樹を引き抜き、今の淨居寺の側に挿した。そして言つた。「この地はまさしく靈地なので、樹木が生き生きとしている」と。その結果、挿木に見事な反応があつた。これが、今の人たちに周ねく知られている青原二十六景の一つである「さかさに挿した荆」である。このさかさに挿されたばらは、文革中に破壊を免れることができずに、根までもうちくだかれたという。

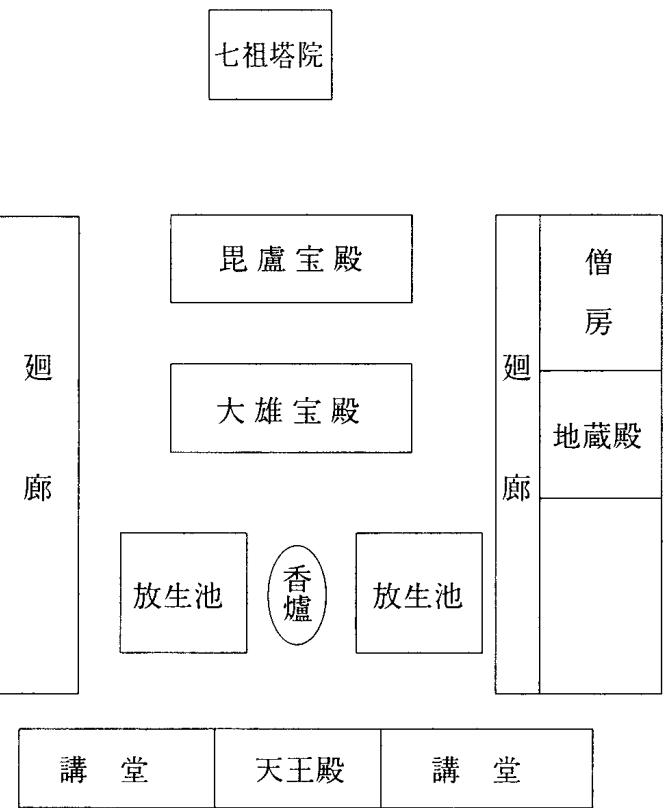
唐の神竜元年（七〇五）、かつて廬陵王に封ぜられた唐の中宗李顯が皇位に復した年、青原山に寺を建てた。始めの名は安隱山の傍にあるので安隱寺と名づけられ、その後、宋の徽宗が淨居寺の名を賜わり、今に至るまでその名を用いている。

開元二年（七一四）、青原行思が韶州（韶関市）の南華寺において曹溪の六祖慧能より法を承けて、六祖の印可を受けて青原山に入り仏法を宏揚した。これに因つて青原山に参じ来る者甚だ多く、青原山は当時の中国の江南の仏教の主流となつた禅宗の中心的な道場となつた。南岳（湖南省衡山）の石頭希遷や、荷澤（山東省菏沢市）の神会などがすべて青原山に来て行思を礼拝し、參禪修行した。その後、行思は法を石頭希遷に伝えた。希遷は南岳に帰り石台に草庵を建てた。今の南岳衡山の南台寺である。この青原山から香火は南岳に移り、仏教の禅宗の青原派が成立した。青原は曹洞宗、法眼宗、雲門宗の三宗の開祖である。行思は「明心見性、頓悟成仏」の教えを堅持したが、「不立文字」の教えは、仏教を学問修行から実践修行の方向に引き入れ、仏教が中国に大發展することを促進させたのである。

行思は唐の開元二十八年（七四一）、享年六十八歳で没した。唐の玄宗は「勅賜建仏濟禪師帰真之塔」を青原山淨居寺の背後に建てたが、世の人々は行思を禪宗第七祖と称した。

行思が没してからまもなく、永泰年間（七六五—六六）に、唐代の名臣で大書法家であった顔真卿が吉州の司馬官に任命されて廬陵に来たが、すぐに青原山淨居寺に行つて七祖の真身を拝登した。顔真卿は七祖行思禪師の徳を讃えるために、「祖闕」の二字を題書して石碑に刻し、淨居寺山門の上にはめこんだのである。この顔真卿の書である「祖闕」が見られる山門は一九八四年九月に修復された。

宋代の米芾は顔真卿の書はほんものであると評した。北宋の著名な文学者である黄庭堅は元豐年間（一〇七八—八五）に泰和県令に任命されたが、「游青原次韵周元翁」（青原に遊び、周元翁に次韻す）という長い詩を書いた。詩の中で七祖行思が石頭希遷と対話した偶話「廬陵の米は高いか安いかという問答」をその詩の間に引き入れて七祖の道場のために色彩を添えたという。この詩は後の人々がそれを八つの石碑の上に刻し、大雄宝殿の両側に一つに分け



青原山淨居寺

長詩「游青原」を作ったが、その詩の中にはこの愛国の名宰相の憂国、憂民の深い心情が満ち溢れていた。この詩は四十一の石碑の上に分けて刻され淨居寺の老齋堂の壁に嵌めこまれたという。文天祥もまた科挙の試験に及第してから、三回にわたって青原山淨居寺に遊んだ。第一回目は理宗の開慶元年（一二五九）、文天祥は上書して宦官を斬ることをお願いしたが、理宗はそれを取りあげなかつたばかりでなく、かえつて文天祥の官職をとりあげた。文天祥は故郷に帰り青原山淨居寺に泊まり竹音楼の中で琴を弾じて暇をつぶしたといわれる。文天祥はさらに三度にわたって官を追われ故郷へ帰つた。

徳祐年間（一二七五）、文天祥が吉州を離れる時、彼はふたたび青原山に往き、当時の淨居寺の住持であった齊禪師と徹夜で仏理と国事を語つた。文天祥の愛国の志と学問の博さに齊禪師は深く尊敬をはらつたという。

宋代の岳飛と同時代の愛国者で主戦論者であった名宰相の李綱は、和平派の排斥を受けたために、朝廷から流罪に処せられて嶺南に向かう途中、特に道を廬陵にとり、専ら青原山の祖庭を訪ねて感銘して筆をふるつて揮毫し一首の

これがために、齊禪師は特に文天祥が題書した「青原山」の牌額をもらい受けて心に留めた。文天祥は草書に勝れていたが自分が身を以て國に殉じる決意を表明するために、楷書で「青原山」という雄勁な文字を書いた。

以上のような名人の墨跡は現在すべて淨居寺内に保存され「青原墨跡四宝」として伝えられている。青原山にある墨跡にはなお明代の有名な哲学者である王守仁が書いた「曹溪宗派」の石碑があり、明代清初の四公子の一人である方以智などの名人の墨跡もあるといわれる。

このほか歴代、青原山に游んだ人には、唐代の名宰相姜公輔、重臣段成式、南宋の名宰相周必大、名臣胡銓、向敏中、名詩人劉辰翁、明代の名臣李東陽、湛若水、清代の名家施閏章、翁方綱、蔣之奇などがいるという。

現存している清の康熙版の『青原山志略』には、五百人

近くの歴代の有名人が青原山を詠んだ詩篇を記載している。清の乾隆帝はしばしば江南に行幸したが、青原山淨居寺に宿し、あわせて淨居寺のために扁額を題書したが、それは大雄宝殿の左側の老斎堂の中に掛けられていた。惜しいことに文革の動乱を経過するうちに、この扁額は行方不明になつたという。

大雄宝殿の背後にある毘盧殿には千手觀音がある。文化大革命の後に訪れた時はこの毘盧殿も屋根が抜けるほど荒廃していたが現在ではすっかり復元されている。

毘盧殿の背後の高台に七祖塔院がある。階段を登ると塔院があり、その中に禪宗第七祖青原行思禪師の墓塔がある。一九九二年十月十八日に完成した塔院は真新しい。かつては塔院もなく、ただ山腹の草むらの中に墓塔があつたのみである。荒涼とした青原山も現在は修復され立派な仏寺となつてている。地藏殿、僧房などの配殿も立派に完成されている。

### 三 宜豊県

#### 洞山普利禪寺

洞山は江西省宜豊県にある風景区である。また洞山は中国の禪宗、曹洞宗の祖庭である。唐の高僧、洞山良价が普利寺を創建して以来、著名な禪林として有名である。

洞山の洞は贛州の方言であり、多くの山に囲まれたところという意味であり、土地の人はこれを洞と呼んでいる。それは湖南の人が「冲」と呼んでいるのと同じである。宜豐県の中に黄岡洞、龍洞、摩古洞などある地名は皆、岩洞の意味ではない。

洞山の周りは十里ある。洞山寺は三六〇メートルの山を

背にした盆地の北端にある。洞山寺のある盆地は環境がよく、山には天を摩する古木がおい茂り、寺院の周りにも松、柏、楓などが茂つており、溪流が林の中を流れている。

この溪流の北岸の断崖に一すじの石板をひいた古道がある。一步一步登つて行くと、樹木や竹林をぬつて道が開けているが、崖の下の溪流の音や、林の中の鳥の鳴き声が聞こえ、時には山を下りてくる和尚に遇うこともあります。深山古刹の趣きを味わうことができる。

坂を登ると、「古洞雲深」と書かれた石の額をはめた亭がある。この亭が『江西通志』にある洞雲亭である。

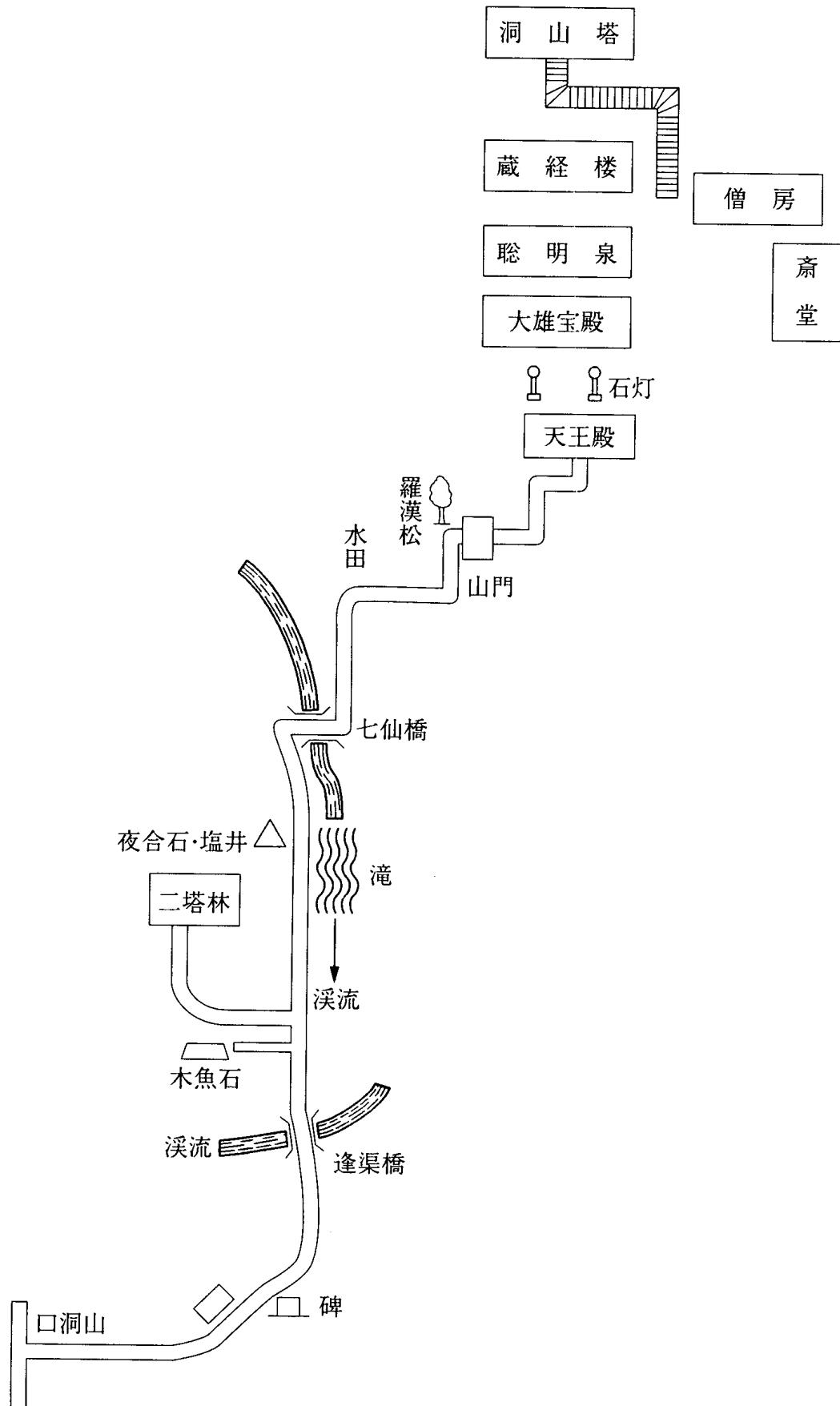
洞雲亭を過ぎて百メートル行くと、谷川を越える橋がある。この寺の開山の良价禅師が水を渡つたところであり、宋代の人が、良价禅師がここで悟りを開いたことを記念して「逢渠橋」を建立した（一〇九八年）。橋の上流には瀑布があり、その溪流が橋の下を流れている。谷川は深い淵を作つたり、岩をうがつて流れ下つていて。

橋を渡つて左へ行くと、崖のそばに一つの大きな黒石があるが、その石の一方は高く、一方は低く凹み、その上には「木魚石」と「響石」などの字が刻されている。その石

の上に登り、その突出している所を叩くと、「ポクポク」という木魚の音が聞こえるという。

橋を渡つて右へ行き、さらに石段を登ると、一すじの滝が落としているが、それは静寂な山の谷間にあり、その音はあたりに響き渡り、その色は銀白のようである。よく晴れた日には陽光がまわりの茂つた木陰から滝の水面を照らし、七色の虹がかかつた水珠が飛び散るのを見ることができるという。滝の周りの樹葉が密集しているので、滝の頂上には小さな隙間があいていて、晴れた日の正午前後の十分位の間だけ、この珍しい景色を見ることができるという。そのため洞山に来る人の中でも、ほとんどの人がこれを見ることができない。その上、昔、来山する人は光の屈折の原理を知らないので、この現象を見てしばしば洞山には「仏光」が現われるといった。仏教聖地には仏光の出現は必ずあるといつてよいであろう。

滝の上には深い淵があり、人がその側を通ると、姿が水面に映り、その傍の石の断崖には「考功泉」の三字が刻されている。この泉は清廉な官員をたたえたものといわれている。



洞山普利禪寺

考功泉の側には二つの突き出た壁が屹立しており、そのいかめしさは、入口がせばまつた石の門のようであり、その上には「夜合石」「夜合靈迹」の文字が刻され、さらに宋の蘇轍の「游洞山」の七言律詩と、元の道彰禪師の「題夜合山」の七言絶句が刻されている。

この石はもともと昼は開き、夜は合わざるといわれているため夜合石といわれる。石の下の岩の間の池には円形の窪地があり、その傍には「塩井」の二字がある。このことは地方志の中にも説かれているが、ある悪僧が塩を盗んで利益をはかつていたが、そのため自動的に開閉する石閥と、自動的に塩が取れる塩井のはたらきが失われてしまつたという。この新昌八景の中の一つといわれる「夜合靈迹」は、この地の一景観を指すのである。

夜合石が傍にある夜合山の上に、僧侶の墓塔が集まっている塔林がある。高く聳える石塔は、雕刻がすばらしく、造形も古く素朴で、石造芸術の珍品であるといわれている。一つひとつの塔の上には皆、洞山普利寺の第二十七代、二十八代、三十一代の住持とその弟子や孫弟子の法号が刻されている。洞山の山の中には塔林が五ヶ所あり、これらの

塔林には、禪林の仏国、釈迦の祖庭、仏門の聖地の意味がこめられているといわれる。

夜合山から下りて、七仙橋を越えて山裾を廻ると眼前が豁然として開けた。山に囲まれた中に、太陽がさんさんと照らしている百畝の広さの水田が現れる。遠くから眺めると、北端の山麓にひろびろとした山門、高く聳えた普利寺の殿堂、蔵經樓、僧房と背後の山の林に隠れた石塔が見える。

山門の赤い壁と青い瓦の屋根が、緑の木々の間に照り映えている。正門の上には「曹洞祖庭」と書かれた扁額がはめられ、壁の上には「仏光普照」「法輪常転」と墨で書かれていて、門の前に羅漢松があるが、その松は石の欄干で囲まれ、竜が蟠かまつているように見え、古木の樹齢の長さをあらわしている。洞山良价がここに住持していた時に植えられたので「千年羅漢松」と呼ばれている。

山門を通過すると天王殿に着く。天王殿を通過すると大雄宝殿がある。大殿の裏には聰明泉がある。聰明泉については、『宜豐縣志』にも述べられており、その清澄な泉の水を飲めば聰明になるという。

藏經樓の右裏手の階段のある山道を登ると洞山墓塔があ

る。深い樹林の中で静寂の気に包まれて墓塔がたたずんでいる。この墓塔こそ「開山始祖良价禪師慧覺宝塔」なのである。塔内の墓碑は唐の咸通十年（八六九）に建てられたものである。

藏經樓において一九九四年十一月に洞山普利禪寺に住した明法法師より洞山について種々お話しをうかがうことができた。また昼食もこの寺の素食を頂いた。田舎の山中の素菜は質素であるが独特の風味を味わうことができた。

#### 四 萍鄉市

##### 楊岐山

楊岐山は歴史は悠久であり、遺跡がたいへんに多く、風景が美しく気候もよい山であるといわれる。史料によると、すでに早く盛唐の時代にこの地に楊岐寺が建てられたという。この寺は禪宗の五家七宗の一つである臨濟宗楊岐派の発生の地である。楊岐派禪宗は中国佛教史の上で重要な地位を占めており、また大きな影響を与え、日本にも伝来したのである。

楊岐山において仏教が盛んになつたのは、萍鄉の歴史や

文化的発展と深い関係がある。禪宗は中国文化を形成する一つの要素であつた。菩提達摩が梁の時代に中国に入り、中国禪宗の開祖となつたが、五祖弘忍になつて南北二宗に分かれた。北宗の神秀は漸修を唱え、南宗の慧能は頓悟を唱えた。初め北宗が勢いがあり、南宗は衰えていたが、慧能の弟子の神会が南宗を立てて北宗を倒し、新しい禪宗を建立したのである。神会が洛陽に入り北宗を打ち倒したのは天宝四年（七四五）であった。楊岐山を開いた乗広禪師は神会の弟子であり、乗広が神会にあつたのは天宝五年（七四六）であり、乗広は神会とともに北宗打倒につくした。天宝十二年、神会の弟子達が武当山や荊州に来た時、乗広は三十七歳にして楊岐山に来たのであつた。

乗広は何故、楊岐山で伝教したのか、劉禹錫は次のように言つた。「彼は仏經を聞いたことがない南方の人たちを憫んでこの山に庵を結び心と環境を静寂にした。考えに応じて教えを立て、至るところで因縁を結んだ」（「遂以攝化爲心、經行不倦、愍彼南裔不聞佛經、由是結廬此山、心與境寂應念以起教隨方而立因」『全唐文』卷六一〇「袁州萍鄉縣楊岐山故広禪師碑」）と。伝教の盛況について劉禹錫

はつづいて次のように説いた。「何旬かにわたって、善良な人たちが帰すべき道を知り、何月かたつと、苦しんでいた人たちが漸く悟った。年月がたつと、口をきけない人がきけるようになり、望みをなくした人が次第にたちあがつた。村の中の金持ちや多くの信者たちが、悉く信願を發して寺を大きくした。法堂と四つのお堂と僧舎に入れば、身心はいつも静寂になつた。山を越えた北側や湘江を涉つた南側から、人々はこの高い山を仰ぎみて、寺の所在を知つたのである」（「居涉旬而善根者知歸、逮周月而帶縛者慚悟、以月倍日、以年倍時、瘖驟洞開、荒憬潛革、邑中長者、十方善衆咸發信願、大其藩垣、法堂四阿、復引僧舎、身心恒寂、象馬交馳、隨其去來、皆得利益、踰嶺之北、涉湘而南、仰茲高山、知道有所在」『全唐文』卷六一〇、同碑）と述べている。

乗広が教えを盛んにしたことは、江西に教えを伝えた馬祖とかわることがなかつた。馬祖は南岳懷壤の弟子であり、また曹洞宗の祖である青原行思の一派である。乗広は楊岐山で活動すること四十余年、八十二歳に至るまで多くの弟子を教えた。

乗広が楊岐山に来てから二十年後、甄叔大師が来た。彼は馬祖の弟子であつたが、乗広を師として仕えた。彼は慧能の第四代目の法孫である。甄叔は楊岐山に四十年余りいた。唐代の有名な文人である至閑と劉禹錫が、曾つて別々に乗広と甄叔の塔銘（「楊岐山甄叔大師碑銘」『全唐文』卷九一九。『全唐文』が撰者を至賢とするのは誤り）を撰述したことからみて、この二人の禪師は同じように無視することができない程の高僧であった。

楊岐山付近は、乗広が洛陽の文化をもたらし、その上、甄叔が苦心して一山を經營したので、当地の文化は大いに盛んになつた。甄叔死後七十年たつと、唐廩の活躍があり、楊岐山禪宗が発生したが、これは偶然ではない。

甄叔が没してから七十年後に、楊岐山長平の唐廩は萍鄉の文化を開いた。萍鄉で始めて唐の進士となつた人でもある。彼はかつて唐の貞觀以前の文章を集めて『貞觀新書』三十巻を編成したという。

彼が書いた詩は『全唐詩』の中に十四首あるが、多くは唐代の有名な詩僧である齊己（『唐才子伝』卷九）と楊岐山に遊んだ時の作である。齊己がかつて楊岐山に来て活動

し、『寄楊岐西峰僧詩』（楊岐の西峰の僧に寄するの詩）を書いた。

西峰殘照東

瀑布酒冥鴻

間憶高窗外

秋晴万里空

藤蔭藏石磴

衣拂落杉風

日有誰來覓

層層鳥道中

この詩をみると、楊岐山の自然がよく描写されており、「秋晴万里空」の一句は楊岐山の秋の晴れわたつた天空が見事に描かれている。

これは甄叔大師死後七十年にあたり、楊岐山の仏教がなお伝統を継承しており、詩僧も来往し、その頃の楊岐山の文化の盛況の一端を見る事ができる。楊岐山の仏教が中心となって多くの文人がこの山に集まってきたのである。

『仏教宗派詳註』（清の楊女会撰、民国十年刻本）の記載によれば、甄叔は馬祖を師としたが、百丈、黄檗をへて臨

濟義玄に至つて一派となり臨済宗と称した。

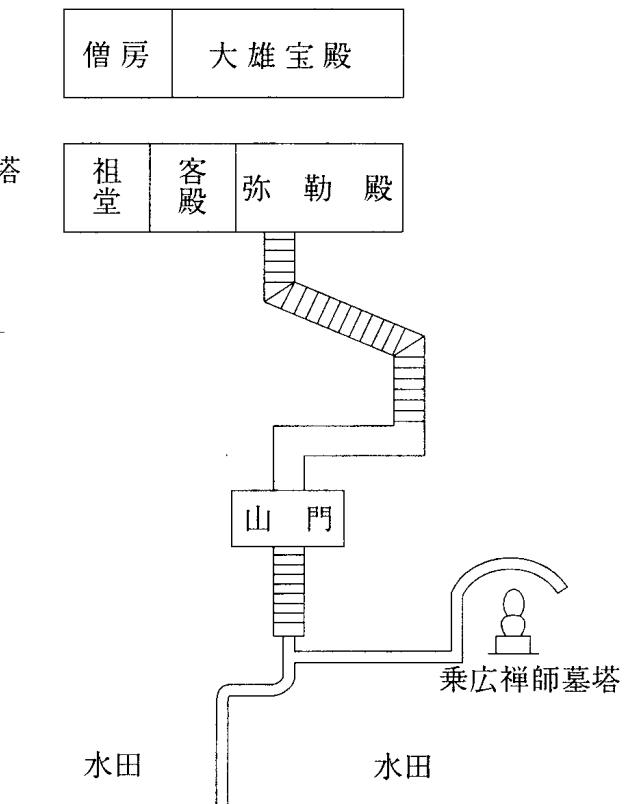
甄叔没後三百年後、宋代になると、臨済宗は楊岐派と黃龍派の二派に分かれた。楊岐山仏教の繼承者、方会（九九三一一〇四六）は楊岐宗を創立し、中国仏教史上の五家七宗の一つとなつた。

佛教史書や『五燈会元』などの諸書の記載によれば、方会は初め慈明に従い、楊岐山から四里の南源山の石霜楚円に参じ、その後、瀏陽の道吾山、石霜山の二寺に移り、楚円の法を嗣いだ。

方会は雲蓋山で宋の慶曆六年（一〇四六）に没したので、その地に塔が建てられた。『大明一統志』卷六三によると、雲蓋山は善化県の西六十里にあるという。禪宗の楊岐派は宋代以降、中国仏教史の上で重要な地位を占めたのである。

楊岐山は楊岐宗の発源の地であるためにこの名がある。楊岐寺は始めは広利寺と呼ばれ、唐代に創建されたが、宋代に普通寺と改名された。

唐代の古寺の景觀については「楊岐山甄叔大師碑銘」（『全唐文』卷九一九）によると、「楊岐山上を独歩すると、花の中に宮勝、仙閣が現われ、この楼台の勢威は虚空を射



楊岐山普通禪院

楊岐山は盆地の周りを峻険な山峰が囲んでいる。その山峰を車で登り、盆地の中央の峠から徒歩で楊岐山普利寺に向かう。徒步で約三十分村道を歩き左折したところに寺院がある。階段を上ると「楊岐山」と書かれた匾額のある山門がある。この山門を入り右折しさらに左折して階段を上ると、弥勒殿に着く。この弥勒殿と並んで客殿と祖堂がある。弥勒殿の入口の右側に甄叔大師碑銘が、左側に乗広禪師碑銘がガラスの中にはめこまれている。乘広禪師碑銘は八〇七年、劉禹錫が撰したものであり、甄叔大師碑銘は三二年に至闇が撰した碑文である。

弥勒殿の背後に大雄宝殿がある。三世仏が安置されている。

楊岐山普通寺の左側の山の斜面には清代の墓塔があるが、この背後に立派な墓塔が一基立っている。これは甄叔大師の墓塔であるという。また寺の右側の水田の中の道をしばらく行くと、小さな墓塔があるが、あるいは乗広禪師の墓塔ではないかともいわれているが、確かなことは不明である。

「楊岐山頂上、建出花宮勝仙闕。樓臺壯勢射虛空、魔界輪幢盡摧折」と楊岐山の宮殿と楼台のありさまを描写している。

楊岐山は盆地の輪幢はことごとく摧破された」（「獨歩楊岐山頂上、建出花宮勝仙闕。樓臺壯勢射虛空、魔界輪幢盡摧折」）と楊岐山の宮殿と楼台のありさまを描写している。

## 五 永修県

### 雲居山真如禪寺

雲居山は、江西省永修県にある。真如寺は雲居山五老峰の前にある。禪宗の曹洞宗の道膺禪師が伝法した場所である。

南宗の張大猷の撰した『雲居開山縁起記』の述べるとによると、雲居山は唐の憲宗、元和三年（八〇八）、當時、道容禪師が雲居山の南麓の瑤田寺に住し、司馬頭陀と二人で山頂に登つてその地を見ると、掌の如く平らであり、鏡のように澄んだ湖があり、山々に屏の如く囲まれていたのでそこに寺を建てたという。

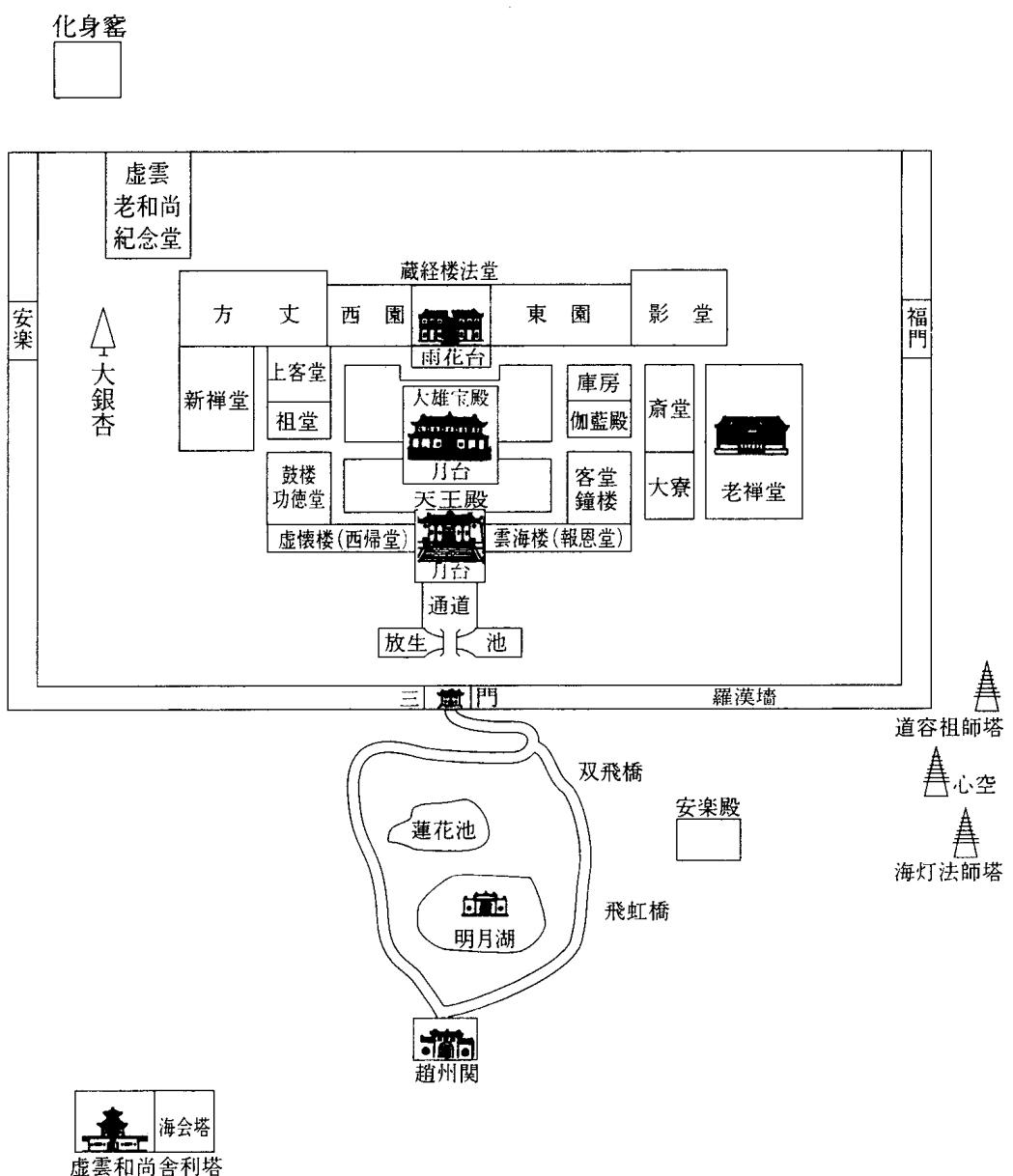
道容が雲居山を開いて、弟子全慶、全海が繼承すること七十年余であった。唐の僖宗の中和二年（八八三）、道膺が鐘王の招請によって山主となり、僧衆雲集し、僖宗が「竜昌禪院」という勅額を下賜した。北宋大中祥符年間（一〇二二—一七）、真宗が真如禪寺と改名して今日に至つてゐる。

大徳禪師は五十余人、住持にはならなかつたが、教化に活躍した禪師は二十人余りあり、禪宗の著名な大刹であつた。道膺禪師は、幽州（河北省）玉田の人であり、曹洞宗の開祖良价禪師の法を受け真如寺に住すること二十余年、門徒が雲集し、極盛時には千余人に達したといふ。唐の天復二年（九〇二）示寂、弘覺禪師と謚す。五代から宋初に、道簡、道昌、懷岳、懷滿、徳縁、智深などが相ついで住持し同じく曹洞の宗風を鼓吹した。その後の住持には清錫、道齊、義能、慧震及び契環などがあり、法眼の一派の禪風を弘めた。とくに契環禪師は真如寺の殿堂の大規模な修理を行つた。それは北宋の中葉頃であつた。

その後、仏印了元（一一三一—九八）が法席をつぎ住僧も五百余人となり禪風は大いに盛んとなつた。仏印は字は覺老、幼い時から智慧すぐれ、經典を見ると忘れることがなかつたといふ。古今に通じ才思が勝れ、飄然としており志は空宗（三論宗）にあつた。

十九歳で廬山開先寺暹禪師より仏法を受け、江州（九江）の承天寺の住持に任せられた。蘇軾と親交があり、彼が金山寺の住持の時に機鋒鋭い問答によつて蘇軾が破れる。

『山志』によると、唐から清にかけて真如禪寺に住した

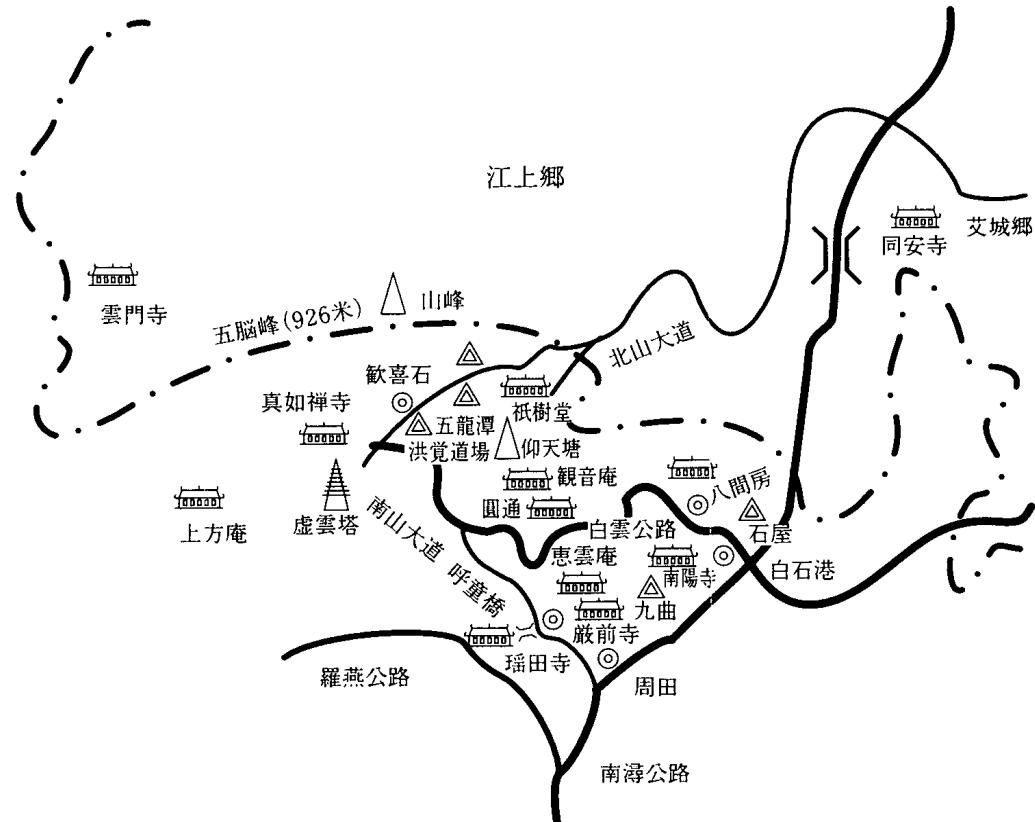


雲居山真如禪寺（『真如禪師簡介』による）

て玉帶を貰つたという逸話がある。宋代、仏印禪師が雲居山真如禪寺の住持であった時、蘇軾や黃庭堅などがしばしばこの山を訪れ、多くの詩文を残した。仏印は彼と同じく前後して住持となつた曉舜、自宝、守億等の人と同じく雲門宗の重要な人物であった。

その後、真如寺は禪宗道場として復興したが、面積は一万余メートル、新しい塑像、二百四十余体、殿堂二十棟、房舎百四十二に及ぶ最大の叢林であった。

真如寺に入ると最初にあるのが趙州閑である。二つの山に挟まれた閑である。唐代に趙州和尚が道膺和尚を訪問し、この閑で問答した故事に因んで趙州閑と呼んだといふ。現在「趙州閑」の石碑があ



雲居山

り、ここに高さ七メートル幅十一メートルの新しい関楼が建てられた。全人大常委副委員長の許徳衍が書いた「趙州関」の匾額がかかげられている。

山門は花崗岩でできた高さ五・五メートルの鉄瓦の門である。山門の上方に中国仏教協会会長趙朴初氏の書いた「真如禪寺」の匾額がある。

真如寺の天王宝殿は高さ七メートル、幅二十二・五メートル、奥行き九・七メートルの建物で、正面には弥勒菩薩、背面には韋馱天像、両側には四天王像がある。天王殿の両側には当山を中興した虚雲和尚の名を冠した虚懷樓（西帰堂）と雲海樓（報恩堂）がある。

大雄宝殿は高さ十六メートル、幅二十七・二メートル、奥行き二十一・七メートルの堂々たる大殿で趙朴初氏の書いた「大雄宝殿」の金字が鮮やかである。大殿の第一層と第二層の間の「四生慈父」の匾額は前住持の朗耀和尚の書いたものである。大殿内には釈迦佛、藥師佛、阿彌陀佛の三尊佛が祀られ、釈迦の両側には迦葉と阿難の二弟子が立っている。大殿の両側に十八羅漢があるのは中国の大殿の普通の構造である。

須弥壇の背後には觀音菩薩がいる。この真如寺の觀音菩薩の海島は高さ十一・五メートル、幅十五メートルもある大きなものである。海島の東側には騎獅の文殊菩薩が、西側には騎象の普賢菩薩がある。

大雄寶殿の背後にあるのが藏經樓である。一階が法堂、二階が藏經樓になつてゐる。法堂は講經と伝戒の場であり、法堂の中央には戒壇がある。この戒壇に登壇して受戒し、初めて一人前の僧たる比丘、あるいは比丘尼となることができる。

藏經樓には中央に毘盧遮那仏が置かれ、毘盧遮那仏の背後には西方三聖（阿彌陀仏、觀世音菩薩、大勢至菩薩）が祀つてある。

中軸線上の左側には、鼓樓、功德堂、祖堂、上客堂、新禪堂、方丈がある。禪堂は修行僧の參禪の場所であるが、真如寺の禪堂は古制にのつとつた禪堂であり、衆寮にもなつてゐる。楼上及び両側の僧房は僧衆の住するところである。禪堂の中央には橋陳如尊者が安置されている。真如寺の禪堂では毎年「禪七」と称する參禪会が行われていて、鼓樓の下層には功德堂がある。

中軸線上の右側には鐘樓、客堂、大寮、斎堂、伽藍殿、庫房、念佛堂があり、さらにその奥には老禪堂、影堂などがある。影堂にはビルマの玉仏が飾られている。なお法堂の両側には東園、西園と称する花壇があり、色とりどりの花が咲いていた。

祖堂と鼓樓の間の道を通つて裏へ出ると、大銀杏（公孫樹）があるが、これは雲居道膺禪師の御手植の木であるといふ。畠の道を通つて寺の背後へ行くと、山の下に虛雲和尚記念堂がある。

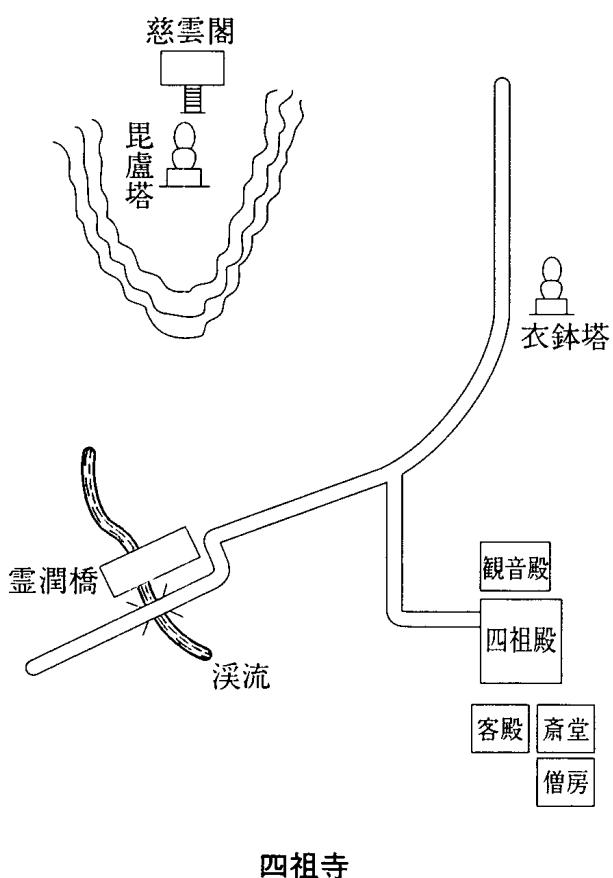
## 六 湖北省黃梅県

### 四祖寺

湖北省黃梅県城の西十五キロに西山（破額山）があるが、二つの峰が屹立しているので双峰山ともいわれる。寺もまた双峰寺と呼ばれ、唐の高祖の武徳七年（六二四）に創建されたが、この寺は禪宗の四祖道信の道場であった。始め正覺寺といわれたが後に四祖寺と改められた。寺の建築は規模が大きく、何度も兵火に遭つて損害を受けたが、現存している建築には唐代の毘盧塔、魯班亭、元代の靈潤橋と

清代に再建された四祖殿、慈雲閣などがある。寺の周りには授法澗、卓錫泉、洗筆池、石魚磯、釣魚台、瀑布濺飛などの名勝古跡や、有名人が詠んだ詩の題刻がある。その中には唐の柳宗元の「破額山」という詩もある。四祖寺は仏教聖地であり、また美しい風景の遊覧地でもある。

四祖道信（五八〇—六五一）は隋唐の高僧で俗姓は司馬。河内（河南省沁陽県）の人で少年の時に出家した。禅宗の



四祖寺

破額山は瑤鳳山とも獅子山とも大葉山とも呼ばれている。四祖寺に入ると先ず目につくのが靈潤橋である。靈潤橋は花橋ともいわれる名橋である。橋の下には巖泉渓が流れている。この橋は元の至正十年（一三五〇）にできたもので単孔アーチ型の石橋である。長さは七・三五メートルである。入口には五花門といわれる門がある。唐の時代、名書家として知られる柳公權（七七八—八六五）が「碧玉流」の三字を残している。この靈潤橋はまことに趣のある石橋で破額山の第一の名勝であるといえる。

この橋の側を通って右側に登つて行くと、やがて四祖寺の大雄宝殿に着く。大殿の右側には客殿があり、その奥に

第三祖の僧璨を師とした。隋の大業年間（六〇五—六一六）に吉州（江西省吉安県）で法を受け、その後、蘄州の黄梅（湖北省黄梅県）の破額山（双峰山）で法を伝えること十余年、最後に法を弘忍に伝えた。唐の永徽二年（六五一）、門人に「一切の諸法は悉く皆解脱せり。汝等各自ら護念して化を未来に流さん」と言いおわって没した。唐の代宗は大医禪師と謚した。後に禅宗の中で尊敬されて四祖となつた。

は僧房がある。大殿の前は広いみかん畠になつていた。

四祖寺の大殿からさらに左の山道を登つて行くと魯班亭に着く。この魯班亭は衆生塔ともいわれ、唐代に建てられたものである。この亭は六角方形石造りのもので、高さ八メートル、幅二メートルのものである。

四祖寺の大殿の向かい側にある山の上にあるのが毘盧塔である。この塔は慈雲塔とも真身塔ともいわれる。道信が円寂後（六五一）、建てられたのもで高さが十一・三四メートルある重檐式の塔である。基壇の間口は十メートル、奥行きは九・五メートルある。塔壁には蓮弁、忍冬花紋などの模様が彫られている。また塔の四門の上部の壁の上に「迦毘羅國誕生塔」「摩迦羅國誕生塔」「迦護國転法輪塔」「舍衛國顯神通塔」などの字が刻されているが、その書法は古朴であるといわれる。この塔は中国最古の塔の一つであり唐代の古塔として有名である。

塔の四周は風光秀麗であり、雄大な景色を展望できる。

この毘盧塔は山の上にあるため、遠くからこれを望見することができ、双峰山のシンボルであるといえる。

### 五祖寺

五祖寺は湖北省黃梅県の城東十二キロの東山（馮茂山）にある。もとの名は東山寺、東禪寺、双峰寺といった。隋末に創建されたが、仏教の禪宗の五祖、大滿禪師弘忍によつて、唐の貞觀から咸亨年間にここに道場が開かれ、仏法を伝授し、寺院を拡建し、繼承人を定め、衣鉢を南宗の初祖である六祖慧能に伝えたので後に五祖寺と改称した。

弘忍禪師に対する歴代の帝王の追封と敕建によつて寺院は不斷に拡大され、最盛時には殿宇九百余間に達し僧は千余人になり、一万人計りの香客が集つて來た。明の万曆年間（一五七三—一六一九）に重建されたが、清の咸豐四年（一八五四）に兵火に遭い、その後また再建された。

現存している殿宇には麻城殿（毘盧殿）、聖母殿、千仏殿、真身殿、および方丈院、禪堂、戒堂、客堂、寮房などがある。

重門に入つて曲がると、花や竹の影が互いにおおい山麓に沿つた石畳の古道を進むと二天門、花橋、涼亭を経て真っ直ぐ寺の背後の白蓮峰に至り、その道すじは三キロにもなり、名勝古迹が到るところにあるが、その著名なものは

次の如くである。

釈迦多宝如来仏塔、十方仏塔、飛虹橋、大満禪師石塔、講經台、授法洞、舍身岩、棋盤石、蓮花洞などがあり、中でも大満禪師塔は喇嘛塔式であり、高さ五メートルの石台の上に建てられているが、青い苔におおわれ、その形態は古い形をもつていて。五祖弘忍の仏骨が塔の下に埋められているといわれている。

白蓮峰は突出した孤峰であり、山頂には白蓮池があるが、弘忍が手すから白蓮を植えたところと伝えられている。この山頂から山麓を眺めると、古寺は幽邃な趣を呈し、遙かに廬山が眺められ、すばらしい景色が見られる。

弘忍（六〇二—六七五）は唐代の僧で、俗姓は周、蘄州黃梅（湖北省黄石市黃梅県）の人で、七歳の時、道信禪師に随つて出家し、具足戒を受け、その後、東山寺に定住し、僧徒を集めて講習したが、門人甚だ多く、東山法門と号した。弘忍から、禪宗では『楞伽経』ではなく『金剛般若経』を用いるようになった。

死後、唐の代宗は弘忍に大満禪師と謚し、その後、禪宗で尊ばれて五祖となつた。著書に『最上乘論』がある。弟

子の中でも有名な人には神秀、慧能、慧安、智讃、玄賾などがある。

**天王殿** 天王殿は新しく建てられた山門の中にある十二メートルの小院である。天王殿と大雄宝殿と毘盧殿と真身殿が四つの主殿であり、山を背にして寺院の中心線上にある。

この殿は唐の大中年間（八五九—八七四）に建てられたが、北宋の治平年間（一〇六四—六七）に修理された。その後、何度も兵火に遭い、その度に修復され、清代に再建された。

天王殿は南に面して弥勒仏が置かれ、その両側には四天王がある。また弥勒仏の背後には韋馱天があり、手に金剛宝杵を持っている。天王殿は破壊されていたが一九八八年に完成した。

**大雄宝殿** 大雄宝殿は大仏殿とも三仏殿ともいう。天王殿の背後の十五段の階段を登ると、そこに大雄宝殿の旧址がある。

この殿は唐の大中年間に建てられたが、宋末に兵火で壊され、元代に修建されたが、元末に兵火に遭い明の洪武年

間（一三六八—九八）に再建された。正徳八年（一五三）又、兵火に遭い、嘉靖元年（一五二二）に再建され、五年かかって完成し、大小の仏像も新しくなった。万暦十九年（一五九二）大修理が行われ絵や像も新しくなった。すぐにはまた兵火に遭い、崇禎初年（一六二一—三二）に再建、明末又、兵火に遭い、清の康熙初年（一六六二—一六四）又元通りに修復された。咸豐四年（一八五四）又兵火に遭い、四面の基脚の石と石刻の大仏の須弥座と殿内にひかれた長方形の石と柱の礎石など的一部が残つた。

この大雄宝殿は寺院の最大の殿宇の一つであるばかりでなく、現在、大型の法事活動の中心の場所であった。殿の中心には三つの大仏、すなわち過去、現在、未来の三世を表わしている三世仏が祀られ、釈迦の両側には小さな仏像があるが、それは迦葉と阿難である。三世仏の左右の両側には文殊と普賢の像がある。東西の両側には十八羅漢が安置されている。

**毘盧殿** 毘盧殿は麻城殿ともいわれた。清の始めにこの殿を修復する前に僧を麻城県に派遣して募金をした。大仏殿の後ろの階段を十六段あがつて聖母殿の前を右へ廻ると

毘盧殿がある。この毘盧殿は大仏殿から三十メートル余り離れており、五祖寺の三番目の正殿である。

この殿は唐の大中年間に建てられ、宋の元符年間（一〇九八—一一〇〇）に再建された。宋元時代以後、何度も兵火にあって毀されたが、その度に再建してきた。この建物は牌樓のよこにあり上部には飛禽、走獸、八仙渡海図の彫塑がある。正門の楣の上に「<sup>より</sup>西來四葉」と書かれた匾額がはめられている。

毘盧殿は、一九八五年に新しく修理されたが、大梁、大柱、大枋は鉄筋コンクリートで造られているが、古い木造の形態を模倣している。また毘盧殿の名前を復活させ一九八七年に毘盧像を造つた。

真身殿は仏祖殿とも祖師殿ともいわれたが今は真身殿といわれる。この殿の後半部は四方が石塔で組みたてられ法雨塔と呼ばれたが、弘忍の真身を祀つた塔である。

この塔はもと講經台の下にあったが、唐の咸亨五年（六七四）、弘忍は弟子の玄蹟に命じて塔を起させ、二月十四日、弘忍が塔は完成したかと聞くと、玄蹟はできあがりましたと答えた。弘忍の没後、弟子はその塔によつて仏祖

殿を建てたのである。

北宋の元祐二年（一〇八七）、法演が来山して住持となり、大いに寺門を盛んにし真身殿と法雨塔を再建した。この殿は宋代から清代に至るまで何度も兵火にあり毀されたが、その度に再建された。民国三十五年（一九四六）に再建され、さらに一九八〇年、および一九四八年に政府が修理した。この毘盧殿の正面の門の上には、上部に「閻浮藏海」下部に「法雨塔」と刻されている。

法雨塔の中には五祖の真身があつたが民国十六年（一九二七）に破壊されたという。一九八五年弘忍像が再塑され塔内に安置されている。

正殿の上方には「正法眼蔵」と書かれた大きな匾額がある。

聖母殿 聖母殿は弘忍の生母を祀った殿堂である。何度

か兵火に遭つたが、一九八五年に重修され、五祖弘忍母親像が再塑された。

娘娘殿 この殿は觀世音菩薩を祀つてゐる。北宋の始めに毘盧殿の右側に建てられたが南宋末期に毀されたという。元明代に再建されたが清の咸豐四年（一八五四）に兵火に

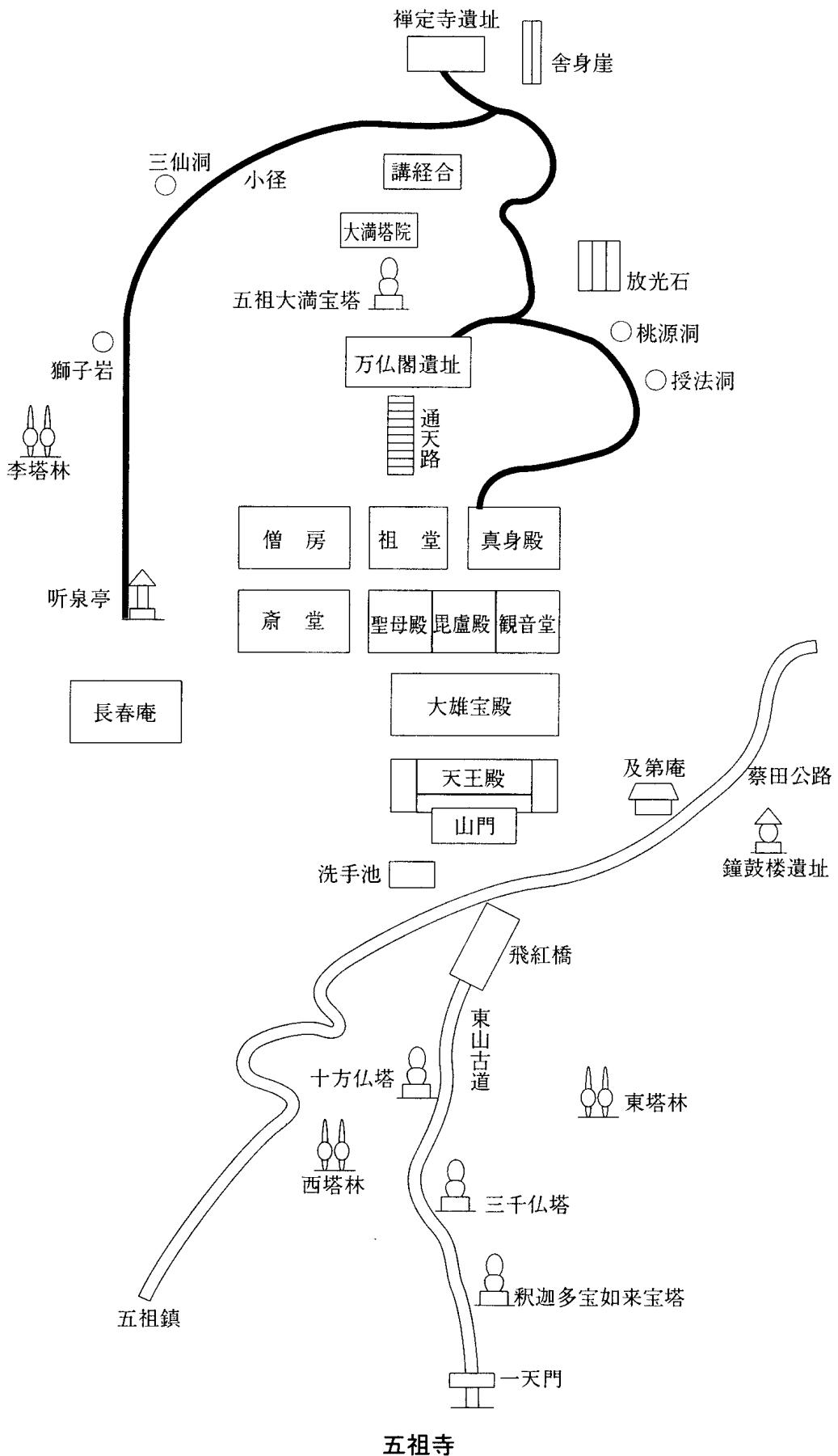
よつて毀されたといふ。

**観音堂** 観音堂は千仏殿ともいわれるが、唐の大中年間に創建されたが、もとの位置は講經台の下にあつたといふ。明の嘉靖初期（一五二二—一六）に重修する時、毘盧殿の側に移し、観音堂と呼ばれた。清の康熙年間に再建された時、千手千眼觀音像を祀つたので千仏殿と呼ばれたこともある。院牆の前門の門楼には「觀音堂」の三字が書かれている。一九八五年に仏像を重塑し、飄海觀音を安置した。

**祖堂** 祖堂は祖師堂とも中仏堂ともいわれる。この堂は唐の顯慶元年（六五六）白蓮峰に建てられたが、北宋の宣和元年（一一一九）、講經台の前の万仏閣の後ろ（現在の五祖大満宝塔のやや右の処）に移された。清代に兵火で焼失。同治年間（一八六二—一七四）に再建する時、真身殿の右側に移された。

通天路の二六九段の階段を真っ直ぐに登つて行くと、万仏閣の遺址に出るが、さらに上方に登ると五祖大満宝塔がある。この宝塔は講經台の下にある。民国二十一年（一九三二）に建てられたものである。基壇の上に高さ二・七六メートルの円柱形の塔身がのり、その上の龕の上方に「五

江西省仏教寺院訪問記（鎌田）



「祖」の二字が彫られ、龕洞の右に「大満」の二字が、左に「宝塔」の二字が刻されている。最上頂には宝珠の塔刹が置かれている。民国十六年（一九二七）四月、弘忍の真身が破毀されたので、この五祖大満宝塔が建てられ、その舍利を埋葬した。その時塔院が建てられたが倒壊したので、一九八七年に再建された、といわれる。

通天路の上り口を右へ行くと、昔の東山古道があるが、林の中をしばらく行くと授法洞に着く。幅と深さが約六メートルぐらいある洞の中には五十人余り入ることができるという。洞門の前の巨石に「授法洞」の三文字が刻されていて、洞の中には五祖の童子石像があつたが文革時に破壊されたという。

授法洞からさらに上に登つて行くと、桃源洞がある。洞口の幅は十一・五メートルあり六十人が入れるという。あたりには松や杉が繁茂し、幽深な趣を呈している。

伝説によると、北宋の時代、仏果克勤と仏鑒慧勲と仏眼清遠の三人が五祖法演の門下であつた時、何時もこの洞の中で話をしていたので三仮洞ともいわれる。石門の上には「桃源洞」の三字が刻されている。

講経台の左の下側の崖の傍に放光石という高さ二百メートル、幅二十二メートルの大きな岩石がある。あたかも大きな銅鏡が立っているかのようである。石面の東のあたりに「放光石」の三字が刻され、その横に線で描かれた仏像が刻されている。

放光石の前にあるのが棋盤石である。地面上に突出した自然の岩石であるが、石の上が平らで棋盤のようになつていいるのでこの名がある。弘忍や歴代の名僧がこの下で棋を打つていたという伝説がある。

講経台は東山の中嶺の岩石の上にある。それは五祖大満宝塔の背後に正方形の石台である。縦横約八メートル、高さは一・八メートルあり、背面は山に連なっている。右側は深い断崖となつていて、伝説によると、弘忍がここで説法していたといふ。宋元時代からは、五祖寺の住持もまたここで説法したと伝えられている。この説法台は北宋の政和二年（一一一二）に建てられたといわれている。この台に登ると視野が開け遠方を眺めることができる。

この講経台の側からさらに山頂を目指すと、山頂には電視塔があり、その近くには舍身崖や禪定寺の遺址、白蓮池、

洗手池などがあるという。

五祖寺の前を通つている蔡田公路を渡つて坂を下りると、すぐに飛虹橋に着く。飛虹橋は俗名を花橋といい、旧山門内の東二十メートルに位置する。元代に創建されたもので、橋は二つの山にはさまれた渓谷の上にかかっている。下には溪流が流れている。清の乾隆五十八年（一七九三）冬、新しく再建されたものである。その形状が飛虹のようであるので飛虹橋と呼ばれている。

この橋は幅五・一六メートル、長さ三十三・六五メートル、高さ八・四五メートルある。青石で造られており、橋面は平坦で、橋の上に長い廊下がある。壁や天井は青瓦で美しい色彩をしている。廊下の両端は牌坊式の門楼になつており、門楼の上には「放下着」「莫錯過」の横額がある。橋の上の廊下が朽ち果てたので一九七五年に修理したが、その際、廊下の中央に仏座を設けたが、一九八五年觀音、文殊、普賢菩薩の三体の仏像を重塑したが、今も橋を渡る人が拌んで通るようになつていて。

飛虹橋の下の石畳の道を下つて行くと、十方仏塔（七仏塔）がある。この塔は北宋の宣和三年（一一二二）に建て

られたもので、砂岩石で造られた八角七層塔で高さは六・三六メートルある。須弥座の上に塔身が置かれている。第一層の塔身の正面に仏龕が設けられ、その上に「十方」の二字が刻され、龕の下には大きな「仏」の字が、その他の七面に七如來の名前、すなわち、南無多宝如來、寶聖如來、妙色身如來、廣博身如來、離怖畏如來、甘露王如來、阿弥陀如來の名が刻されている。第二、第三、第四層の正面にも仏龕があり、その中に仏像が安置されている。

この十方仏塔からさらに下ると三千仏塔がある。白色の砂岩石でできた八角五層石塔で高さは六メートル余である。須弥座の四面に力士像が刻されている。塔身の第一層の正面に仏龕があり、第二層の正面に仏像が刻され、その右に「三千」の文字が、左に「仏塔」の文字が見える。この塔は北宋の宣和三年（一一二二）に建立されたといわれ、岩石の上に屹立している。

東山古道をさらに下つて行くと、釈迦多宝如來仏塔がある。この仏塔は東山南麓の小さな丘の上にあり、東山古道の一天門から三百メートル余り登つたところである。この塔もまた北宋の宣和三年（一一二二）の建立である。白色

の砂粒石でできている八角五層塔で高さは六メートル余りある。下の須弥座の八面には雄建な托塔力士像が刻されている。塔身の南面には仏龕があり、その中に仏像が祀られている。仏龕の右には、「釈迦多宝如来仏塔」の八字が刻され、その左側には募縁した建塔者の姓名が刻されている。最上層には蓮瓣の宝蓋があり、その上には覆鉢と宝珠頂がある。この塔はその形態が端正であり、雕刻もまた秀逸であるため、五祖寺の重点文物の一つとされている。一九八四年に文物管理所が整地して新しく囲いをつけ、正面には階段を造つた。

そのほか五祖寺には多くの名勝や塔林がある。東山古道に沿つて一大門を入ると、釈迦多宝如来仏塔があり、さらに二大門を通ると三千仏塔があり、その両側には東塔林や西塔林などの墓塔がある。飛虹橋の上の蔡田公路に沿つたところには、洗手池、油樅樹、及第庵、鐘鼓樓遺址などがある。

また長治庵から听泉亭に行き、その左側の小径を登つて行くと、李塔林、獅子石、鎖龜石、嘯虎石、三仙洞、碧玉泉などの名勝遺跡があり、さらに登ると講經台の上で東山

古道に連なっている。昔は東山古道の一天門から五祖寺に入り、飛虹橋を渡つて山門に到り、さらに天王殿、大雄宝殿、毘盧殿、真身殿などを巡拝し、ついで寺院の建物の右裏手にある東山古道に沿つて授宝洞に至り、さらに山頂をめざしたのであろう。